12　次の文章は江戸時代に編まれた見聞・逸話集の一節である。読んで後の問いに答えよ。　　　　　　　　　　　　　　　〈新潟大〉二〇二二年度出題

　の南に住めるといふ人、博学にして仕へを求めず。家のほとりに多くひたりければ、世の人是を蘭園の隠士とぞ呼びける。の人管弦の道に妙にして、とりわきのことをよく弾きしかば、其の頃名高き皆親しく交はりて、音律を論じけるに、並ぶ者さらになかりしとかや。明和五年の春の頃、大和国法隆寺にを出して、諸人に見する事の有りしに、其の中にの国より、に奉りしといふ琴のことありけるを、もとより好める道なれば、見まほしくての寺に至りしに、さまざまの宝どもある中に、彼の琴のことの聞きしより見るは勝りければ、でひて、かたへなる僧に、琴の形写さまほしきを言ふに、「よかんなり」とあれば、懐にまうけたる墨・筆・など取り出して、あたりあたりばかり写すほどに、黄なる衣着たる僧の寄り来て、「こはなぞ、まさなし」とむ。はじめ傍らの僧の許せし由を言へども聞きも入れず。御堂の傍らにて行きて、かへすがへす「ただＡ此の願ひによりて、京よりふりはへ詣で来て侍れば、たとへる事ありとも、げて願ひのまま写させ給ひてよ」と、手をすりをさへつきて、よろづにへども聞かず。事ある由にて出で去りぬ。なほさてまむこと口をしくて、ある人に此の僧の坊を問ふに「弥勒院に」と教ふ。

　さて行きて従者とも語らひて、さまざまに言はすれど、へもなし。とかうするほどに日も暮れぬ。いはむかたなくしきままに、取り出して、

　　Ｂとにかくにひきわづらひつ七筋の琴の緒よりも強きこころを

と書き付けて、「明日ア参りなむ」とて差し置きて帰りぬ。行きたれば、有りつる僧出で逢ひて、「きのふまで、さばかりの御志とも知らでいなび申しつること、Ｃいかにひたぶるなりとしさせ給ひてむ。恥づかしさよ。いざ給へ。方丈にて見せ参らせむ」とて伴ひ行き、彼の琴取り下ろして見するに、あまりの嬉しさに胸打ち騒ぐばかりなれば、やうやう心を鎮めて見るに、其の形常にあらず。上みな黒く塗りたり。おもてはことごとく断紋有りて、牛の毛の如くなるあり。また、其の間に梅ののやうなるもの、三つ二つづつ現れて、五つあるもに見ゆ。是をなむ牛毛断、梅花断とはイ言ふめる。およそ断紋さまざまある中にも、分きて梅花断は昔よりきはめて古き琴のしるしにて、ありがたき宝とするとかや。さて、より尾に至るまでの、大きさ、広さなんどことごとく写し取り、己が家に帰りてのち、Ｄらよき材を選びて、其の式により数面造り出して世に伝へけり。

（松井成教筆写『落栗物語』による）

（注）

　源竜――鈴木蘭園（１７４１～１７９０）という医師。

　琴のこと――「きん」と読む場合の「琴」は中国に由来する通常七弦の古楽器を指し、江戸時代当時の日本において文人に好まれ、その形状、奏法の復元が試みられていた。また「こと」は、この場合弦楽器全般を指す言葉。

　伶官――音楽のことを司る官吏。

　什物――長年所蔵されている宝物。

　上宮太子に奉りしといふ琴のこと――「聖徳太子に贈られたと言われる七弦琴」の意。実際には、琴の裏に、唐時代開元十二年（７２４）、中国で造られたと記されている。

　断紋――琴の表面に塗った漆が自然に裂けて出来た文様。通常の漆器には生じず、琴の発する音を受け続け五百年以上を経た古い琴にのみ生じる、として珍重された。

問１　二重傍線部ア「参りなむ」、イ「言ふめる」を、例にならって文法的に説明せよ。

［例］「論じける」

　　論じ（サ行変格活用動詞「論ず」の連用形）・ける（過去の助動詞「けり」の連体形）

問２　傍線部Ａ「此の願ひ」とは何か。本文に即して具体的に説明せよ。

◎問３　傍線部Ｂ「とにかくにひきわづらひつ七筋の琴の緒よりも強きこころを」の和歌について、「ひきわづらひつ」の部分に用いられている技巧に注意しながら、その内容を、八十字以内で述べよ。

問４　傍線部Ｃ「いかにひたぶるなりと思し貶させ給ひてむ」を、本文に即して現代語訳せよ。

問５　傍線部Ｄ「自らよき材を選びて、其の式により数面造り出して世に伝へけり」とあるが、源竜がこのような行為をなした理由は何か。本文全体から推量し、三十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝参り（ラ行四段活用動詞「参る」の連用形）・な（強意の助動詞「ぬ」の未然形）・む（意志の助動詞「む」の終止形）

　　　イ＝言ふ（ハ行四段活用動詞「言ふ」の終止形）・める（推定の助動詞「めり」の連体形）

問２　Ａ高麗から聖徳太子に贈られたと言われる七弦琴を、法隆寺の宝物公開の機会に見（て模写し）たいという、Ｂ管弦愛好家としての源竜の願い。

「琴を見たい」という核心が書けていないものは全体０。

Ａ＝５〔「聖徳太子」「法隆寺」に触れていないものは各減点２。〕

Ｂ＝５〔主体としての「源竜」がないものは０。「管弦好き」「管弦の名人」などの記述のないものは減点２。〕

問３　Ａ聖徳太子ゆかりの貴重な七弦琴を弾くことが許されないのはつらいが、Ｂ琴の模写を許さない僧の強情な心をいて、許可を得ることすら難しいのはなおさらつらいということ。（79字）

「ひく」が「弾く」と「惹く」との意味を掛けているという内容が読み取れない場合は全体０。

Ａ＝５〔「貴重な」「めったに手にできない」などの表現のないものは減点２。〕

Ｂ＝５〔「強情」「かたくな」などの表現のないものは減点２。「模写を許してもらえない」という趣旨を欠いているものは減点３。〕

問４　模写を許さないことで、Ａあなたは私のことをＢ意固地だと（きっと）どれほど軽蔑しなさっているだろうか

Ｂが０の場合は全体０。

Ａ＝４〔「あなたは」「私のことを」各２。〕

Ｂ＝６〔「どれほど～だろうか」の疑問文の訳になっていないものは０。「意固地だ」「軽蔑する」「なさる」の不備は各減点２。疑問文なので「きっと」はなくても許容。〕

問５　貴重な琴の姿を世人が制限なく見られるようにしたかったから。（29字）

「貴重な琴の姿を公開したい」という趣旨がなければ全体０。「制限なく」のニュアンスがないものは減点４。

【現代語訳】

神楽岡の南に住んでいる源竜という人は、博学で（ありながら）出仕（する地位）を求めない。家のそばに藤袴が多く生えていたので、世の人は彼を蘭園の隠士と呼んだ。この人は管弦の道に精通していて、特に七弦琴を上手に弾いたので、当時の高名な伶官が皆（彼と）親しく交際して、音律を論じたが、並ぶ者が全くいなかったとかいうことだ。明和五年の春の頃、大和国法隆寺で長年所蔵されている宝物を出して、多くの人に見せることがあったときに、その中に高麗の国から、聖徳太子に贈られたと言われる七弦琴があったのを、（源竜は）元来愛好している道だから、見たくてその寺にやってきたが、さまざまの宝物が数々ある中に、あの七弦琴が聞いていた以上に（実際に）見る方が勝っていたので、ひどく心酔して、そばにいる僧に、琴の形を模写したい旨を言うと、「よいようだ」という返事なので、懐中に準備していた墨・筆・竹尺などを取り出して、あちらこちらと写すときに、黄色の衣を着た僧が寄って来て、「これはどうして（模写をしているのか）、よくない」と（源竜を）める。（源竜は）先ほどそばの僧が許可した旨を言うが（咎めた僧は）聞き入れない。（源竜は僧を）御堂のそばに連れて行って、繰り返し「ただこの願いによって、京からわざわざ参詣していますので、たとえ支障があるとしても、ぜひとも願いどおりに写させてくださりませ」と、手をすりあわせて額までも（地に）ついて、さまざまに願い求めるが（僧は）聞かない。（そして）用事があるそぶりで去ってしまった。（源竜は）やはりそのまま（模写が）終わることが残念で、ある人にこの僧の坊（のこと）を尋ねると「弥勒院に（いる）」と（その人が）教える。

　そこで（源竜は、弥勒院に）行って従者とも相談して、さまざまに（取り次ぎを）言わせるが、返事もない。あれこれするうちに日も暮れてしまった。言いようもなくつらいので、畳紙を取り出して、

どうしても弾く〔惹く〕のに困ってしまう。七弦琴の緒よりも強情な（僧の）心を。

と書きつけて、「明日参上しよう」と言って置いて帰った。翌早朝に（源竜が、弥勒院に）行ったところ、昨日の僧が出てきて逢って、「昨日まで、それほどの御意志とも知らないで（模写を）禁じ申し上げたことで、問４（あなたは私のことを）意固地だと（きっと）どれほど軽蔑しなさっているだろうか。恥ずかしいことよ。さあいらっしゃい。方丈で見せ申し上げよう」と言って連れて行き、あの琴を取り下ろして見せると、（源竜は）あまりの嬉しさに胸が躍るばかりなので、しだいに心を静めて見ると、その（琴の）形は尋常ではない。上部はみな黒く塗ってある。表はすべてに断紋があって、牛の毛のようなものがある。また、その間に梅の花弁のようなものが、三つ二つずつ現れて、五つあるものも稀に見える。これを牛毛断・梅花断とはいうようだ。およそ断紋がさまざまにある中でも、とりわけ梅花断は昔から特別古い琴のしるしであって、めったにない宝とするとかいうことだ。そこで、裏上頭から尾に至るまでの、大きさ、広さなどを（源竜は）すべて写し取り、自分の家に帰ってから後、自らよい材料を選んで、その寸法によって（七弦琴を）数面造り出して世に伝えたということだ。